

# ランボーとは何者か

第1回 小林秀雄に衝撃を与えた男

奥本大三郎（フランス文学者）



17歳のアルチュール・ランボー。

©The Granger Collection/amanaimages

フランスの詩人、アルチュール・ランボー。かつては日本でも小林秀雄、中原中也らの翻訳で盛んに読まれたが、最近ではランボーの名を耳にする機会は激減した。しかし、ランボーという一人の天才の生涯は、人間のあらゆる側面を私たちに見せつける。この連載では三七歳の若さでこの世を去るまで、疾風怒濤のごとく生き抜いた詩人の生涯を、筆者による新訳とともに辿る。

外国語の詩の翻訳は、それだけでは詩の作品としてはめったに成功しないものである。たしかに、それは難しい話で、詩人のぎりぎりの表現を、風土も文化も違う国の言語に無理やり移しかえようというのである。

いかにそれが困難であるか、俳句を英語に訳す、というようなことをちょっと想像してみても分かる。原詩の意味するように思われるところを、やっとのことで日本語に移した御本人は大満足であろうとも、原文にまったく接していない読者にとっては、ただの読みにくい、たどたどしい、奇妙な日本語にすぎないということが多い。

それでも訳さずにはいられない。艱難辛苦の末、訳したときは、「出来た！ 我ながら名訳！」と思いついて、い込んでいても、それは原文の残像、残響が頭にあるからである。

譬えて言ってみれば、書の世界という臨書のようなもの、お手本にしている法帖の、王羲之なり、褚遂良なりの美しい、立派な文字が眼底に残っている

を加えながら、詩人の生涯と結びつけてみようと思う。引用する詩句は自分で思い通り訳す。もちろん、私の頭の中では、原詩の響きが残っていて、訳詩の拙さを絶えず本能的に補っている。

ランボーは詩のみならず、当然のことながら、書簡文においてもきわめて巧みである。あるときは擲筆するように、またあるときは哀願するように、またあるときには、過激に、激烈に、彼は書く。

そうかと思うと図々しく、かつ魅力的な物言い、詩をちりばめたりして手紙を送りつけるのである。詩を捨ててからのことはその手紙によることとなる。いずれにしても詩人自身の書いたものによって伝記的事実を推測し、叙述する。だからこれは、一種のランボー「自伝」なのである。

## 今、ランボーの何が知られているか

ランボーといえば、一九世紀パリの詩壇に、そこそそ彗星のように姿を現し、華々しいその詩業の絶頂期に、なぜか突然、詩を放棄した天才詩人として知られている。

同時代の大詩人ステファヌ・マラルメは「端倪すべからざる通行者」と賛嘆し、二〇世紀の詩人で外交官であったポール・クロデルは「野生状態の神秘家」と評した。

詩を棄てたあと、この偉大な歩行者ランボーは、世界を放浪し、あげくの果てはアビシニア（現在の

エチオピア）の武器商人となって、砂漠の彼方に姿を消し、骨肉腫を患って三〇半ばでマルセイユの病院に入院して、片脚切断。退院するが、病状が悪化して死んだのであった。

感傷的なものが好んで読まれてきた。『地獄の季節』のように叫び、嘆き、呪詛し、罵る反逆者の言葉はあまり見られなかったようである。

## 小林、中原とランボー

小林秀雄は、ランボーがいきなり自分を叩きのめしたと書く。

……その時、僕は、神田をぶらぶらあるいてみた、と書いてもよい。向うからやつて来た見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめしたのである。僕には、何の準備もなかった。ある本屋の店頭で、偶然見つけたメルキユル版の『地獄の季節』の見すばらしい豆本に、どんな烈しい爆薬が仕掛けられていたか、僕は夢にも考へてはいなかった。

（『ランボオ詩集』創元ライブラリ）

たしかに、ランボーの『地獄の季節』のような、さまざまな点で烈しい詩集は、前代未聞であった。

それまでは、ロマン派やユゴーやボードレール、ヴェルレーヌのような、どちらかといえば静謐な、

るから、それを模して書いた自分の字までが、いいように見えるだけのことなのかもしれない。

偉い先生の訳詩集を読んで、「よくこんな難しいものを訳したなあ、でも、ハッキリ言って日本語の詩になっていないんじゃないか。いづれにせよ、詩として、これだけを読む気がしないし、そもそも、日本語でこんな変な言い方はしないよ。口調だってよくないし……」

と、こまで言ってしまうとはしばしばある。

——と、ここまで言ってしまうとは、もはや引っ込みがつかないのだけれど……いや、だから、私としては、何とか、他人が読む気するように、ランボーの作品の時系列の配列に注意を払い、なぜ彼がこんなものを書いたのか、背景に何があるのかを、解説

浅草公園の八卦やが、私は廿二歳の時から衰運に向つたと言つた。私が初めてランボオを読みみたしたのは廿三歳の春だから、ランボオは私の衰運と共に現れたわけになる。（中略）

その頃、私はたゞ、うつろな表情をして一日おきに、吾妻橋からボンボン蒸気につかつて、向島の銘酒屋の女の処に通つてゐただけだ。船は、私のお臍のあたりまで機械の音をひどかせて早いやうな遅いやうな速力で、泥河をかき分けて行く。私の身体は舳先に坐つて、半分は屋根の蔭になり、半分は冷つこい様な陽に舐められて、「地獄の季節」と一緒に懐中にした、女に買つて行く穴子のお鮓が、潰れやしないかと時々気を配つたり、流れて来る炭俵を見送つたり、丸太が一本位は船と衝突してもよささうなものだなどと、なるたけ考へても何んにもならない事を撰つて考へる事にしやうと思つたりする。この『地獄の季節』には、一つばい仮名がふつてあつた、どうしても、見当の付かない処は、エチプトの王様の名前みたいに、枠を書いて入れてある。この安本は大事にしてゐたが、友達の富永太郎が死んだ時、一緒に